

ステビア作の実態と問題点

小池俊吉・杉本文三 (九州農業試験場)

KOIKE, T. and B. SUGIMOTO : Actual Situations and Problems of "Stevia" (*Stevia rebaudiana* BERTONI) Farming in Miyazaki Prefecture

新規作物であるステビア作の実態と今後の課題を明らかにするため、ここでは、宮崎県での生産量の大部分を占める高原町を対象として実態調査分析を行なったので、その結果を報告する。

ステビアは南米原産のキク科の多年生草本であって、しょ糖の約 300 倍の甘味をもつ自然甘味料として注目されている。わが国には 1970 年 (国立衛生試験所) および 1971 年 (農事試) に栽培試験材料として原産地より始めて導入された。これまでの試験結果によれば、栽培適応性が高く、広く栽培が可能な作物である。その今後の需要は、砂糖の国際需給事情、人工甘味料の使用量や国民保健の問題がからみ軽々に予測しがたいが、自然甘味資源の乏しいわが国では一定量の確保が望ましいとされている。しかし、商品作物としての栽培実績はわずか数年であり、その全国生産量はこれまでの最高年次の 1978 年でも 204 ha、412 t (乾燥葉) にすぎない。

1. 導入経過と現況

高原町の自然立地は、霧島山地北東部の標高約 200 m の盆地で、その気象条件は内陸性で概して高温多雨であり、原産地の条件に似ているといわれる。その導入にあたっては、元町長の I 氏の着眼と熱心な栽培試験や普及指導の努力によるところが大きく、わが国でも極めて早い時期 (1974 年) に生産が開始され、これまでの最高年次 (1978 年) には 20 ha、35 t の生産があった。高原町の農業は田畑・畜産 (主に肉用牛) の複合経営が中心で、ステビアは畑作物として一戸当たり 10 ~ 20 a の作付が多く、1980 年現在、栽培戸数約 80 戸、作付面積 3.5 ha (県約 90 戸・4.1 ha) である。

2. 栽培実態と経営的性格

ステビアの栽培法は、導入初期には実生・さし木・株分けなどにより、収穫回数も 1 回刈から 4 ~ 5 回刈など種々の試みがなされたが、現在は株分け (毎年改植) ・年 2 回刈取が広く行なわれている。その概要を第 1 表に示した。現状では作業の多くは人力でなされ、管理は比較的粗放で、労働配分としては収穫作業に 60% 以上 (170 時間) が集中している。経営部門としては農業粗収益に占める割合は 5 ~ 10% と小さく、作業の性格からおもに婦人、老人が担当している。収益性は、収量の個別差や価格変動が大きいので適確につかみにくいが、中核的農家の水準から収量 300 kg/10 a、価格 900 円/kg (1980 年

第 1 表 栽培技術体系 (株分け栽培)

作業名	作業手段	作業時期	10 a 当り労働時間
株掘出し・株分け	くわ・スコップ	3/下	25 時間
基肥施肥・本ほ整地	耕うん機・人力	3/中	22
定植	人力	3/下	30
防除	噴霧器・人力	6/上, 9/上	3
除草	人力	6/上, 9/上	10
追肥	人力	7/中	2
刈取・乾燥	はさみ・かま, 人力	7/上~中, 9/下~10/上	150
脱葉・調製・出荷	人力, トラック	7/上~中, 9/下~10/上	20
株掘上げ・貯蔵	くわ・スコップ	12/上	8
計			270

注) 町資料および事例農家の実績により作成

度契約実績) として試算すると、粗収入 27 万円、残余法で求めた生産所得 15.7 万円、所得率 58%、投下労働日 (8 時間) 当たり所得 4,640 円となる。これは町の田植労賃 4,000 円よりも高く、また、その所得の額および率は、さといも・茶には及ばないものの普通畑作物 (生産費調査・1975 ~ 1979 年度平均) よりも高い。

このようなことから、ステビアは資本粗放、労働集約的で、栽培技術および栽培担当者の体力などをあまり要しない作物といえる。そして、乾燥葉での出荷は貯蔵性、輸送性の点で遠隔地でも適合性があり、現在の価格水準であれば比較的高い土地生産性が示される。従って、立地・経営の諸条件から作物選択が限られている高原町などでは、土地生産性追求によって所得を増大させる可能性のある作物として考えられる。

3. 今後の問題点

以上のようなステビア作は、現状ではなお生産・需要の動向把握が困難であり、精製部門との価格を中心とする契約関係も安定していない。このことが栽培農家にとって最大の問題である。また、ステビア栽培では機械化作業が少なく、優良品種の育成も望まれており、省力多収技術の確立が課題である。一方、ステビアはキク科作物としての特性から、既存作物との組合せにより新たな作付方式形成の可能性も期待される。これらの条件整備によっては、ステビア作が個別経営の副次的な一部門として成立・定着する可能性が考えられる。